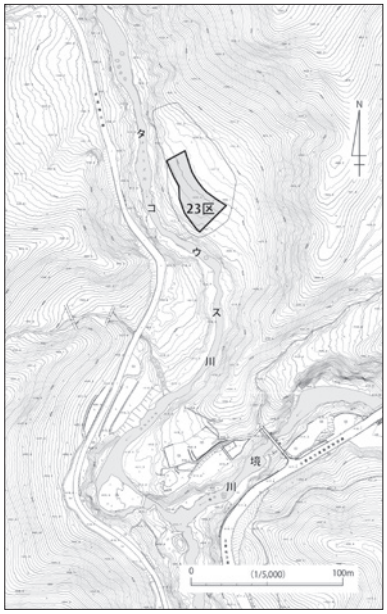
根道外遺跡（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「田口」）

所　在　地　北設楽郡設楽町八橋字根道外
（北緯35度07分23秒 東経137度34分42秒）
調査理由　設楽ダム
調査期間　令和5年11月～令和6年1月
調査面積　825㎡
担　当　者　鬼頭 剛・川添和暁・荒木徳人

調査の経過　調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託を受け、令和５年11月から令和６年１月にかけて実施した。調査面積は825㎡で、調査対象地は遺跡範囲の南西側に設定された。

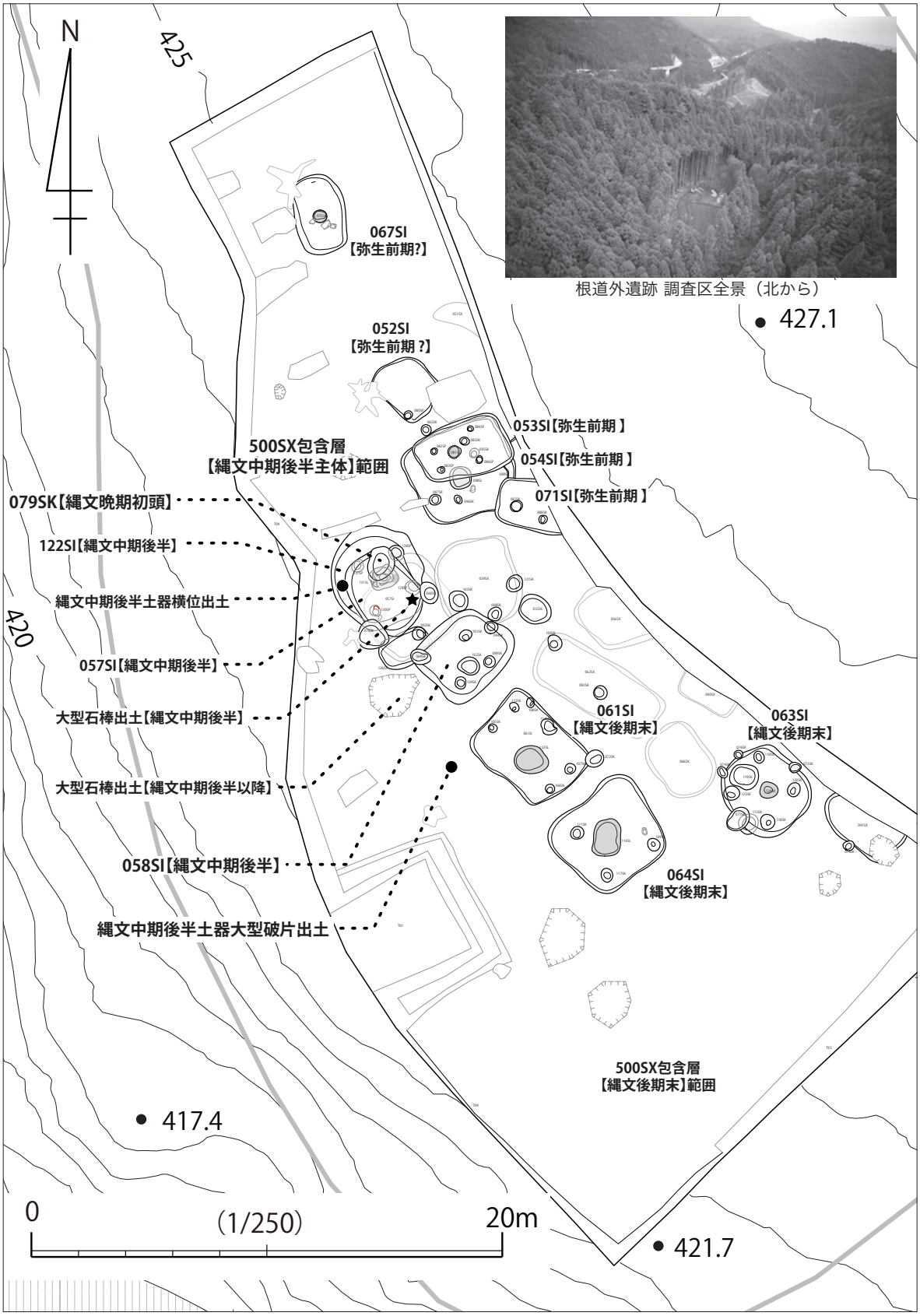


下延坂遺跡 調査区位置図

立地と環境　根道外遺跡は、境川とタコウズ川との間に形成された細尾根の北東から南西に向かって延びる緩斜面上に立地する。遺跡は北から東側にクランクして流れるタコウズ川の左岸にあり、調査前の地表で標高は420～426mを測る。当地は、境川とタコウズ川の合流点「べんてんぶち」から北に約300mの距離に位置している。遺跡北・東・南の各側には片麻岩由来の尾根筋によって遺跡全体が囲われている形となっており、緩傾斜の高まりは、このなかで北東から南西方向に向かって流れ込んだ土石流堆積によって形成されている。

調査の概要　基本層序は調査区南壁の土層断面情報が参考になる。上からⅠ層：表土（5cm）、Ⅱ層：灰褐色粘土（旧耕作土、20～30cm）【近世以降】、Ⅲ層：赤褐色礫層（土石流堆積層１、80cm）【古墳～古代】、Ⅳ層：灰褐色粘土（遺物包含層、20cm）【縄文時代中期～弥生時代中期】、Ⅴ層：赤褐色の砂礫層（土石流堆積層、20cm）【縄文時代前期か】、Ⅵ層：にぶい褐色粘土質シルト層（水成堆積層、20cm）【縄文時代早期以前か】、Ⅶ層：赤褐色礫層（土石流堆積層３、厚さ不詳）【縄文時代早期以前か】、Ⅷ層：黄褐色粘土・シルト層および黄褐色砂礫層【地山】、である。地形全体は北側が高く南側に向かって低くなっており、調査区中央で堆積状況に変化が認められる。すなわち、調査区北側半分では、Ⅴ層～Ⅶ層の堆積がなく、Ⅳ層下に、低位の地山層である黄褐色砂礫層が露出する。この黄褐色砂礫層は河床景観を呈するもので、旧タコウズ川が開削されて現在の位置に固定する前段階の河床であったと考えられる。

戦国期～近世　調査は、Ⅲ層上面での検出面（検出１）と、Ⅳ層～Ⅴ層上面での検出面（検出２）で調査を実施した。検出１では、耕作地跡が調査区全体で検出された。この面では、調査区外東側をも含めて中世～戦国期の陶器片が表面採集されたことから、少なくとも戦国期以降には、Ⅲ層の堆積後に地盤が安定し土地利用が活発化した可能性がある。今回の調査では、戦国期と直接的に特定できる遺構の検出はなかった。また、耕作地跡は近世～近代に属す



調査区全体図【縄文時代・弥生時代】

るものと考えられる。

縄文～弥生　検出２では、縄文時代中期後半から弥生時代の遺構・遺物が調査された。さらに以下の３時期に分けることができる。

縄文時代中期後半　縄文時代中期後半の活動痕跡は、調査区中央部付近でまとまって見つかっている。主要遺構には、竪穴建物跡３基がある。058SIは一辺４m弱の隅丸方形プランを呈しており、中央に大型の土坑、四隅にはピットと思われる遺構が確認されている。出土遺物は少なく、中期後半の大型土器片が遺構底面から出土した。057SIと122SIは重複して確認された遺構である。057SIは４×３mほどの隅丸方形プランを呈するもので、底面中央には焼土の広がりを確認するとともに、南東端では石に囲われて大型石棒が横位状態で出土した。この石棒は埋土の堆積が進んだ段階で、土坑が掘られて埋設されたもので、大型石棒はもともと立てられていた可能性もある。122SIは掘り方底面から5～10cm上面に板石が敷かれた痕跡があり、床面が更新された痕跡であると考えられる。この床面更新の埋土中からは、縄文時代中後半の深鉢が一個体横位状態で出土した。また、本来はこの面で築かれたと考えられる石囲炉跡も見つかっており、北西隅には副炉が設けられていた。西側斜面下方に向かって、遺物包含層500SXを検出した。深鉢大型破片などが見つかった。

縄文時代後期末　縄文時代後期末～晩期の活動痕跡は調査区南側が主体で、中央にも局所的に確認された。竪穴建物跡３基と土坑が調査された。竪穴建物跡の中で、061SIは５×４mの隅丸方形状の竪穴建物跡で、地床炉跡内から土器片がまとまって出土した。また、062SIは５×５mほどの隅丸方形状の竪穴建物跡で、遺構掘り方に対して、中央には炉跡に由来する焼土の塊が盛り上げるように検出された。おそらく本来は同じ場所に掘り方を共有する竪穴建物跡の床面が上位レベルに存在していたものと考えられる。057SIに重複する形で、土坑079SKが築かれていた。埋土には焼土塊と礫が多量に含まれており、炉跡の構造物などが一括廃棄された可能性が高い。西側斜面下方に向かって形成された遺物包含層500SXからは、土器片や打製石斧などの石器のほか、有溝石錘や石棒が出土した。

弥生時代前期　弥生時代前期の活動痕跡は、調査区北側が主体である。竪穴建物跡５基が調査された。特に良好な状態で見つかったのは、053SIと054SI、067SIで、いずれも掘り方中央に地床炉跡とおぼしき焼土範囲が確認された。053SI・067SIは４×３m程度、054SIは５×４m程度である。いずれの炉跡も脇から板石などが見つかっており、炉縁石であった可能性が高い。053SIと054SIからは、条痕文土器の中でも、特に大型壺片が散在して出土していた。

（川添和暁）

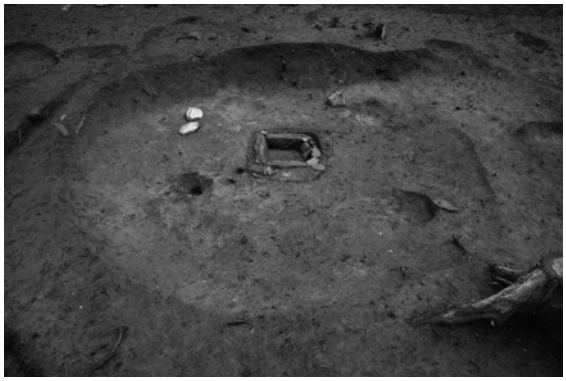
根道外遺跡 23 区　調査成果一覧

段階	調査層位	時期	検出遺構	出土遺物	備考
検出１	Ⅲ層上面	戦国期以降	耕作地跡（水田区角）20 以上	縄文土器・石器・山茶碗・天目茶碗など	調査区西端で調査された500SX（遺物包含層）は、傾斜地での層位認識の誤りのため、「検出１」で調査を実施した。
検出２	Ⅳ層およびⅧ層上面（調査区北側） Ⅳ層およびⅤ層上面（調査区南側）	縄文時代中期～弥生時代中期	○縄文時代中期後半【竪穴建物跡３・ピット・土坑・遺物包含層】 ○縄文時代後期末～晩期【竪穴建物跡３・土坑・ピット・遺物包含層】 ○弥生時代前期～中期【竪穴建物跡５・ピット】	○縄文時代中期【土器・石器（石鏃・剝片石核類・磨石敲石類・石皿台石類）・大型石棒】、 ○縄文時代後期末～晩期【土器・石器（石鏃・打製石斧・剝片石核類・磨石敲石類・石皿台石類）・有溝石錘】 ○弥生時代前期～中期【土器・石器（剝片石核類・磨石敲石類・石皿台石類）】	

竪穴建物跡057SI内 大型石棒(北東から)

竪穴建物跡122SI内土器出土状況（南から）

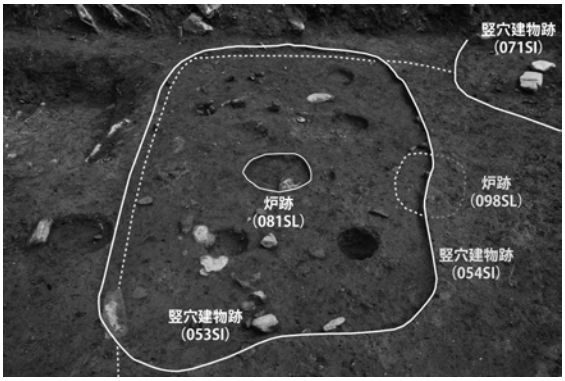
竪穴建物跡122SI床面検出１(北から)



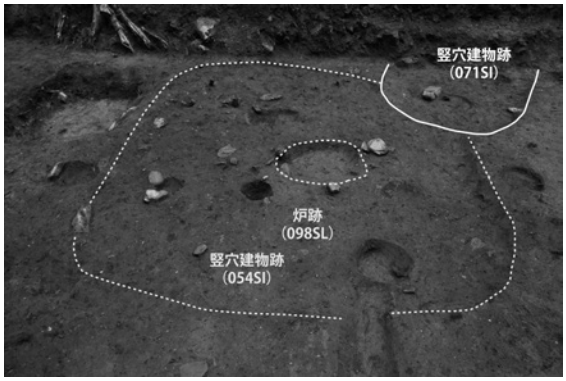
竪穴建物跡122SI床面検出２(西から)

竪穴建物跡061SI 炉跡内遺物出土状況(北西から)

竪穴建物跡064SI炉跡検出状況（南西から）



竪穴建物跡053SI・054SI・071SII(西から)



竪穴建物跡054SI・071SI(西から)